

板状粘土を筒状に立てた形を生かして！

—— 布目の凹凸模様（材質感）を取り入れた陶人形 ——



表現内容の要素と発想の視点

- ・表現材料：楽焼用粘土
- ・造形要素（色／形／材質）：
板状粘土を筒状に立てた形
布目模様とその凹凸の材質感
- ・表現技法：板づくり、タタラづくり、布目型押し、貼りつけ、切り抜き、線彫り、ほか
- ・表現様式：具象形
- ・表現対象／主題：陶人形／
表現者が布目を生かした表現を思考、追究、決定する

写真1 「想い」〔約 1200℃焼成／無釉・部分炭化〕（高さ約 18 cm）

造形発想と表現について

粘土を板状に延ばすとき、粘土の下に麻などの布を敷く。粘土が板に貼りつかないようするためである。このとき粘土の表面には、敷いた布の目が模様として写し出される。この布目の凹凸模様（材質感）を意図的に作品に取り入れて表現することができる。

布には、麻布など荒く編まれたものが向いているが、その他、レースやネットなど網状に編まれたものならどんなものでも活用できる。

ここでは、それらの布目の凹凸模様を衣服などに生かし、筒状の素朴な陶人形をつくる。

約 1 kg の楽焼用粘土を、タタラ板（厚さ 8 mm）と粘土延べ棒で板状に延ばし、布目の凹

凸模様をつける。

凹凸模様をつけた板状粘土を筒状や円錐状に丸めて立て、顔や手などをつけ加えた素朴な陶人形である。

1200℃程度で無釉、部分炭化焼成をした。

用具／材料

楽焼用粘土（約 1 kg）、どべ、タタラ板（厚さ 8 mm）、粘土延べ棒、粘土板、粘土べら各種、粘土切り針、クレイガン、敷布（綿布／麻布／レース／ネット、ほか）、なめし革、筆、カップ（どべ入れ）、雑巾、新聞紙、ほか

表現のプロセスと内容

●粘土を板状に延ばす

- ・約 1 kg の楽焼用粘土を楕円形になるように丸め、麻や布の上で叩いて延ばす。
- ・手で叩き、粘土が板状にある程度延びたら、タタラ板（8mmの厚さ）と粘土延べ棒を使って板をさらに均一に延ばす。（写真2）
《下に敷いた布は、粘土がつかないためのものである。》

●板状粘土に布目の凹凸模様をつける

- ・板状粘土の上に布を敷き、上から押さえるように粘土延べ棒を転がして布目模様をつける。（写真3）
- ・複数の布目模様を組み合わせるときには、あらかじめ布を組み合わせさせて板状粘土の上に置き、粘土延べ棒を転がして布目模様をつける。（写真4）

- ・布目に凹凸模様がついたら、ゆっくりと布をはがす。（写真5）

●板状粘土を筒や円錐状に丸めて立てる

- ・板状粘土を立てながら、筒状、あるいは円錐状に丸める。（写真6）
《丸めると底面になる部分をあらかじめ切っておくこともできる。この場合は「こけし」のような筒状の円柱形になり、構造的に安定する。一方、裾の広がりを表現したいときは底面になる部分を切り取らずに丸めるが、構造的に不安定にならないようにバランスを調整する。》
- ・つくりたい人形（表現対象／モチーフ）の形をイメージしながら全体の形を整える。（写真7）
《粘土を貼り合わせる糊代^{のりしろ}となる部分の位



写真2



写真3



写真4

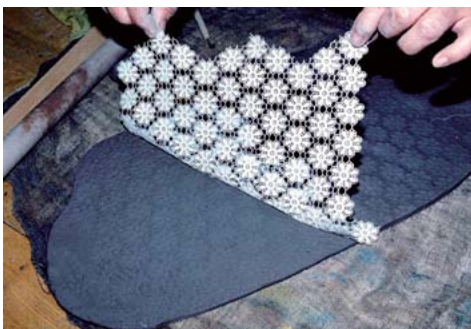


写真5



写真6



写真7

置を確かめておく。》(写真8)

- ・糊代に「どべ」をつけて貼り合わせ、筒をしっかりと立たせる。(写真9)

《「どべ」は接着剤ではなく、接続のためのじゅうてんざい充填剤と考えるとよい。しっかりと押さえて接続する。》

《筒や円錐状の粘土に人形としての部分をつけ加えるので、しっかりと安定した構造が必要である》

●頭や顔、首、手などの部分をつくる

- ・ここでは目や鼻など、顔の表情は単純に表現し、素朴なものにした。(写真10)

- ・首は、体との接合部にするため、長めにつくっておく。

●頭や顔、首、手などを体につける

- ・首や各部分に「どべ」を十分につけ、しっかりと筒状の体に固定する。(写真11)
- ・顔や首をつける角度、手の表情など、つけ方により人形の雰囲気が変わるので、全体を捉えながら表現を工夫する。(写真12)

●細部をつけて完成させる

- ・髪の毛は粘土を手で細く丸めてつけることもできる。ここではクレイガンで糸状粘土をつくって髪にしたものもある。



写真8



写真9



写真10



写真11



写真12

《毛の太さで、雰囲気も変わる。》(写真13・14)

- ・ウェーブやドレープをつけて衣服の感じを表現することもできる。(写真15)
- ・粘土の切り口を整える。(写真16)
- ・作品のイメージ、主題に合わせて装飾をつけたり、切り取ったりして完成させる。(写真17・18)

●完成したら十分に乾燥させ、約1200℃で部分炭化焼成する

- ・完成したら十分に乾燥させる。(写真19)
- ・ここでの部分炭化焼成とは、陶人形に色彩変化や表情をつけるため、作品を「鞘」に入れ、炭を加えて焼成したものである。



写真13



写真15



写真16



写真14



写真17



写真18



写真19

表現のバラエティ

写真 20 完成作品 底面になる部分を切って筒状に丸めた形から「ミロチとクレチ」〔約 1200℃焼成／無釉・部分炭化〕（各高さ約 20 cm）



写真 21 完成作品 ドレスの下部の焦げ茶色が炭により炭化されたところ「ラテンドレス」〔約 1200℃焼成／無釉・部分炭化〕（高さ約 22 cm）



写真 22 完成作品 「バラの装い」〔約 1200℃焼成／無釉・部分炭化〕（高さ約 20 cm）



写真 23 完成作品 「お出かけ」〔約 1200℃焼成／無釉・部分炭化〕（高さ約 20 cm）